

GAKKAN GAKUFU



特集 東京大学制作展 10 周年を迎えて

担当教員代表：荒川忠一

情報学環・学際情報学府の代表的な活動のひとつとして、メディア芸術を中心に据え、講義の一形態として開催する「東京大学制作展」が、10 周年という節目を数えるに至った。ここに、学生プロデューサーの一人である吉村君から本年の制作展の内容を紹介し、つづいて、本年 3 月まで長年指導に当たった鈴木太郎氏（現在、東京芸術大学准教授）から制作展の歴史を振り返っていただく。

1. 本年度の制作展開催

学生プロデューサー：吉村圭悟、原田 篤

本年度で 15 回目を迎える東京大学制作展を、12 月 4 日から 12 月 9 日までの計 6 日間、工学部 2 号館の展示室などで開催した。東京大学制作展では、学生が現在研究している内容や、研究の過程で身につけた技術を、「作品」という形で表現し、学内や学会等での専門家に向けた研究発表に終わらせることなく、広く一般の方々に見て頂くことを目的としている。今回のテーマは参加者全員の総意から「mosaic」と定め、多様な作品・多様な作家・そして多様な来場者から成り立つ本東京大学制作展の 1 つの指針とした。このテーマの下、各作品は、自身の研究より派生したものから、個人の趣味嗜好を色濃く反映したものまで、各々異なる思いを表現したものばかりとなり、その数は全 20 作品に達した。来場者数に関しても、昨年比で約 1 割程度増加し、計 800 人余りの来場者を迎えることとなった。中には著名なアーティストの方が訪れ、アドバイスを下さることもあり、各作家にとっても大変貴重な機会となった。

今回、第 15 回東京大学制作展を実施するにあたり、約 8 ヶ月前から準備を重ねてきた。制作展では、個々の作品制作に加え、学生が主体となって、会場設計から広報活動までの全ての企画・運営を行っている。そのため、授業時間に行うミーティングでは、作品の制作者と教員を含む参加者が作品のコンセプトや技術について意見交換を行い、また各学生が受け持つ係の進捗確認を行う。運営は、全体を統括する「プロデューサー」を中心に、ポスターやパンフレットなどを作成する「デザイン班」、プレスリリースの実施や展示内容に関する事前告知を行う「広報班」、外部告知用に web ページを作成し、且つ展示中はその様子を記録に収める「web・記録班」、会場の作品配置や演出を行う「会場班」に分かれ行ってきた。会期中はアンケートを実施し、会期後回収したアンケートを集計し、全体の反省点をまとめることで、来年度以降の制作展の更なる質の向上を目指している。



写真 1. 開催に先立つ内覧会での指導の様子

2. 制作展の 10 年を振り返って

東京芸術大学准教授：鈴木太郎

[はじめに]

東京大学制作展は、情報学環・学際情報学府という学際的な組織の中で実際に作品制作とそのプロデュースを行うことで、一般の方に日々の研究内容を作品というカタチを通してよりわかりやすく表すことを目的としている。独自の複雑な研究を理解してもらうには、まずはその研究内容を誰の目にもわかりやすく提示する必要がある。

[実践の場としての制作展]

制作展は、研究内容をメディアアートの展覧会という枠の中で表現し、まとまった成果として一般の方に理解しやすい形に落とし込むことで、研究成果のプレゼンテーション実践の場となっている。制作展では作品を置くだけでなく会場の空間演出を重要視している。場の雰囲気が良いと体験者の意識も集中し、研究成果そのものが理解されやすい状況が生まれる。

この制作展が一般の美術系大学の行う展覧会と異なる点は、出展者が作品の横で作品の解説をしていることである。本来作品とは作品そのものが全てを語ることが望ましいが、作家自らが鑑賞者とコミュニケーションをとることで、その研究に対する一般の方の意見、感想を直接的に得ることが可能になる。

[制作展のこれまで]

制作展は、2001 年、情報学環・学際情報学府が発足して間もない頃に情報学環が主催し、その後、学生が中心となって開催された催しを前身としている。2004 年度より "iii Exhibition" と名前を変え、学際情報学府のカリキュラムの一環として、開催されるようになった。"iii Exhibition" という名称になってからは 10 年の歴史を持つ展覧会である。

2008 年には、オーストリアのリンツで開催されたアルスエレクトロニカにおけるキャンパス展と、台北で開催された DAICE における交流展示という二つの海外における展示機会を得、高い評価を受けている。特にアルスエレクトロニカのキャンパス展では総合大学として初めて東京大学が招待され、展示 24 作品中、制作展関連作品が 10 点展示された。これ以外にも、学内外で行われる様々なイベントにも優れた作品が出展され、制作展自体もその評価や注目度を高めてきた。広報等の効果もあり、来場者数も年々増えている。

[おわりに]

制作展の授業を受けた学生たちは、培ったプレゼンテーション技能を生かし、その後の進路も大手有名企業への就職や、起業、研究者への道で有名になるなど、面白い活動をしている。文系、理系問わず、様々な学生が交流を持つことの出来る情報学環だからこそ、様々な可能性が生まれる。これらが実を結ぶ場所のひとつがこの制作展なのである。

10 年の歴史を持つ制作展の、今後の展開に期待している。

デザイン・赤川智洋 (特任研究員)

東京大学・高麗大学校「学生発表ワークショップ」



11月29日から30日にかけて、韓国ソウルにある高麗大学校にて、東京大学・高麗大学校「学生発表ワークショップ」が行われた（主催：情報学環メディアコンテンツ研究機構＋高麗大学校応用文化研究所）。今後、継続して開催される予定の合同ワークショップの初回を飾る今回は、「身体、イメージ、メディア」をテーマとし、東京大学から9名の教員・学生が参加した。

ワークショップ初日は、メディア・アーティスト藤幡正樹のインタラクティブ・アート作品『Beyond Pages』からメディアの問題を引き出した、石田英敬教授の基調講演から幕を開けた。石田教授の講演は、高麗大学校 Sung Do Kim 教授をはじめとする両校の教員・学生からの活発な質疑応答の歓迎を受け、その後、ミュージックビデオおよび医療における身体イメージを分析した2名の教員研究発表が続いた。

ワークショップ2日目は、学生を中心とした研究発表が行われ、8本の論文が読まれた。それぞれの研究主題は、テレビにおける報道の問題、トラウマをめぐるドキュメンタリー映画、絵画をめぐる言説分析、ケータイ小説、書店に焦点を当てた知識の地理学、美術館学、アニメまで多岐に渡っていたが、どの発表の後にも積極的な議論が続いた。研究発表および質疑応答は英語で行われたが、激しい議論こそワークショップの醍醐味ではないかと思う。いずれの学生も、今後の研究のための有益な示唆を得て、帰路についた。（特任講師・滝浪佑紀）

日本学術会議シンポジウム 「ユビキタス状況認識と 時空間データの新展開」開催



10月4日、東京大学工学部2号館情報学環プレゼンテーションルームにおいて、日本学術会議情報学委員会ユビキタス状況認識社会基盤分科会・主催（大学院情報学環、ユビキタス社会情報基盤研究センター・共催）による公開シンポジウム「ユビキタス状況認識と時空間データ

の新展開」が開催された。近年、ユビキタスコンピューティングが目指す「状況に応じた最適化サービスの提供」のための社会基盤整備が進み、行政・流通・安全安心・災害対応などにおいて国民生活に大きな改革をもたらすことが期待されている。このような技術的・社会的背景のもと、今回のシンポジウムは、モノの属性情報と時空間情報を統合した状況情報、およびその土台となるオープンでユニバーサルな情報社会基盤を確立することの重要性を議論することを目的に開催された。まず、分科会委員長である情報学環・坂村健教授による基調講演が行われ、続いて、慶應義塾大学・徳田英幸教授による「ユビキタスサービスとオープンデータ」、ATR 知能ロボティクス研究所・萩田紀博所長による「街角のユビキタス状況認識とロボットナビゲーション」、奈良大学・碓井照子名誉教授による「地籍調査とユビキタス空間情報」、法政大学・森田喬教授による「空間推論機能からみた住居表示システムの類型化」についての各講演が行われた。講演後のパネルディスカッションでは、参加者から様々な意見が寄せられ、将来の「ユビキタス状況認識情報社会」の実現へ向けた現状と課題について活発な議論が行われた。（准教授・石川徹）

留学生イベント 2013 「学府主催－文京区歴史散策 （ウォーキングツアー）」



学際情報学府では近年、留学生向けにイベントを企画しており、今年度は学生の提案を基に「留学生と日本人学生との交流」を目的とし、留学生と日本人学生を対象とした、文京区歴史散策（ウォーキングツアー）を実施し、学生、教職員合わせて19名が参加した。午前中は旧岩崎邸をガイドと共に見学。そして午後は日本語と英語によるボランティアガイドのもと、講道館や鋳坂、菊富士ホテル跡など本郷キャンパス周辺の文学史跡や寺院を見学し、参加者各自が熱心に説明に聞き入っていた。

私たちは日常を過ごしている地域のことを普段はあまり気にしないであろうが、多くの由緒ある建造物、そして優れた文化が溢れていることを改めて認識するよい機会になった。（留学生支援室）

【公開ゼミ】茂木健一郎 × 佐倉統 「イグノランス—無知こそ 科学の原動力—」



撮影:東京化学同人

11月27日工学部2号館にて、脳科学者・茂木健一郎氏と佐倉統教授の対談が開催された。本対談は「イグノランス—無知こそ科学の原動力—」の翻訳出版（著者：S.Firestein コロンビア大教授・訳者：佐倉統・小田文子）に先だって企画されたもので、イグノランス（まだわからないこと）が如何に科学を進歩させる原動力になるかというテーマをきっかけに、茂木／佐倉ワールドが繰り広げられた。

「如何にして問いを立てるか？」はイグノランスを科学として形作る上での最初の取り組みだが、茂木健一郎さんが開口一番「俺は問いの立て方に失敗してしまった。クオリアという問いを立ててしまった」と衝撃のカミングアウト。滅多に聞けない茂木さんの東大時代の研究内容から32歳でクオリアという問いを立てるに至る話を伺った。

さらに話は佐倉教授のチンパンジー研究時代へと移り、何故か佐倉教授のチンパンジーのモノマネが披露された（ご本人曰く、昔はもっと上手かった）。

最後にはイグノランスを超えて学際領域の在り方にまで話題が及び、実に多彩で知的刺激あふれる対談であった。本書は東京化学同人より2014年2月下旬に刊行の予定である。（特任研究員・網盛一郎）

記録映画 WS 開催

11月24日、福武ラーニングシアターにおいて、記録映画アーカイブプロジェクトの第11回ワークショップ「戦後史の切断面（2）1968 映像のコミュニケーション」が開催された。1969年1月の本学安田講堂における紛争を報じたニュース映画を皮切りに、「おきなわ—日本 1968」「死者よ来たりて我が退路を断て」「69.6.15」「地下広場」などいずれも、1968年当時の学生運動をテーマにした映画の上映を行った。上映後、まず筒井武文教授（東京藝術大学）の司会のもと映画制作当時の貴重なエピソードの数々が関係者によって語られた。続いて、パネリストである長崎浩氏（評論家）、筒井教授（上記）の両名から、それぞれの切り口で当時の社会状況と上映作品についての解説が語られた。最後に、吉見俊哉教授（情報学環）をコーディネーターとして全体討論がおこなわれた。来場者の現役学生からも活発な発言が飛び出し、45年の時を経て、本郷の会場はあついムードに包まれた。（学術支援専門職員・山内隆治）

人事異動

教員 採用 11/1 KHAN, M. Fahim Ferdous（カン、エム・ファヒム・フェルドウス）助教

Books

『これからの医療コミュニケーションへ向けて』

石崎雅人・野呂幾久子監修
篠原出版社／2013年8月



医療コミュニケーション研究は、専門家社会におけるコミュニケーション研究の中でも最も研究がすすんでいる分野です。本書では、コミュニケーションにおいて重要とされる共通基盤の構築を目的として、患者と医療者のコミュニケーションだけでなく、それを支える基盤である医療情報、医療安全・チーム医療、医療コミュニケーション教育まで幅広い話題に関して論考をまとめました。

『首都大地震 揺れやすさマップ』

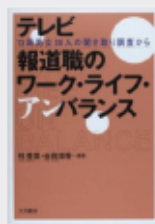
目黒公郎 監修・遠藤宏之 著
旬報社／2013年10月



適切な防災対策の実現には、土地の地勢（歴史や特性）の理解が不可欠です。本書は、首都直下地震が切迫する中で、現在の地図と関東大震災当時の地図を比較し、①地盤や地形の特徴、②関東大震災と東日本大震災での震度、③過去・現在の地名の三つのアプローチから、その場所がどの程度揺れるのかについて解説しています。

『テレビ報道職のワーク・ライフ・アンバランス』

林香里・谷岡理香 編著
大月書店／2013年11月



ネット時代の今日も、テレビの報道の影響力は強い。また、テレビ局は就職先としても人気が高い。しかし、テレビ報道の制作に携わっている人たちの実態はあまり知られていない。彼・彼女たちの生き方、働き方、キャリアパスをロングインタビューしながら、個人のあり方が、報道内容にどう反映されているのかを探った書です。

あしがき

ニューズレター『学環学府』は2002年に初号が出てから12年、今回で41号を迎えました。情報学環は2000年に誕生した部局ですから、ニューズレターを創刊号から繰っていくと、学環の歴史を感じていただけるのではないかと思います。今回特集を組んだ制作展とも、ともに歩んできた10数年です。私自身は2006年から編集を担当してきましたが、その頃の学環は当時の学環長の言葉を借りるならば、たくさん種から芽が出て、熱帯雨林が広がっていくような若い活力に溢れていました。その後育った樹木は幹を太らせ、小さな島から荒波の大海に船を漕ぎ出すがごとく、四方へ根を、枝を伸ばしていきました。さて、現在の学環、今後の学環はどのような姿になっていくか、皆様どのように想像されますでしょうか。私が編集に関わらせていただくのはこれが最後となります。今までご指導くださった先生方、ご協力くださった方々、快く原稿をお寄せくださった皆様、手に取りお読みくださったすべての方に心より感謝申し上げます。（前波奈保子）

ソウル大学・東京大学共同シンポジウム



11月8～9日の二日間、情報学環・学際情報学府と韓国・ソウル大学言論情報学科との学術交流プログラム「日韓共同シンポジウム」が、「Participatory culture and technology 参加型文化と技術」というテーマで開催された。このプログラムは、90年代半ばに始まったソウル大学との学術交流の一環であり、毎年一度、本学とソウル大学で交互にシンポジウムを開催する形で進められてきた。学生達による研究交流プログラムとして展開してから10年目となる今年は、本学が開催役を務め、ソウル大学の教員及び学生、総勢10名が来日した。

プログラムの一日目、8日の午前は福武ラーニング・シアターにて、現代韓国研究センターの木宮正史センター長の開会の辞

に続き、本学とソウル大学の教員による研究発表およびディスカッションのセッションが開かれた。本学からは国際活動委員長の林香里教授ほか3名の教員が、ソウル大学からはホン・ソッキョン副教授を含め2名の教員が最新研究業績について発表およびディスカッションを行った。続いて工学部2号館9階教室にて開かれた午後のテーマ別セッションでは、事前選考で選ばれた修士・博士課程の学生12人（本学:5人、ソウル大学:7人）が各自の研究業績について発表を行い、ディスカッションを交わした。

二日目の9日は、都内関連各所の視察、および学外セミナーが行われた。午前はお台場にある日本科学未来館のメディアラボを訪問し、本学の苗村健教授の展示による仮想現実工房を視察した。午後は、六本木にあるテレビ朝日に移動し、放送局内部を見学した後、現場のプロデューサー達を交えてセミナーを行った。海外大学との合同プログラムとして長い歴史を誇るだけに、本学とソウル大学の間の相互理解およびプログラムについてのコミットメントが高く、互いに濃密な議論ができ、充実した2日間となった。（国際活動委員会 助教・金暎和）

東京大学 マイナンバー制度に関するシンポジウム

11月18日、弥生講堂・一条ホールにおいて「東京大学 マイナンバー制度に関するシンポジウム」が開催された。主催は東京大学情報理工学系研究科、情報学環、法学政治学研究科、公共政策大学院。東京大学ソーシャル ICT グローバル・クリエイティブリーダー育成プログラム（GCL）とソーシャル ICT 研究センターが共催し、三菱 UFJ ニコス（株）が後援した。

2013年5月のマイナンバー法の成立後、個人情報の保護と利活用が社会的の中心的課題の一つとなっている。税と社会保障の一体改革に始まり、マイナンバー法によりさまざまな行政の情報化、国民の利便性の向上が期待されている。一方でその実現のためには個人のプライバシーに対し、技術的な解決方法と制度面での解決方法を連携させる必要があり、さらには人々が利用するための運用方法や、その影響の評価方法までさまざまな側面からの検討を行う必要がある。

本シンポジウムはそのような背景の下、マイナンバー法が今後どのように運用され、我々の実生活にどう影響するかを議論する場として、法律・マネジメント・技術の各分野における専門家の意見交換を目的に開催された。



(C)情報理工・GCL 広報企画

総合司会は情報理工学系研究科長の坂井修一教授が務め、公共政策大学院大学の城山英明教授による開会挨拶、濱田純一総長による総長挨拶の後、内閣官房の向井治紀審議官、奈良先端大の山口英教授、法学政治学研究科の宇賀克也教授による政策・技術・法律の各分野からの講演が行われた。

講演後には情報学環長の須藤修教授がモデレータを務めるパネルディスカッションが行われ、講演者や会場の参加者を交えた活発な議論が行われた。（工学系研究科 D2 須原宜史）

学環学府 41 2. 2014

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府

Interfaculty Initiative in Information Studies
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies,
The University of Tokyo

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

編集委員：厩本純一・前波奈保子・佐藤彩夏

mail : news@iii.u-tokyo.ac.jp / <http://www.iii.u-tokyo.ac.jp>